

# 小学校外国語活動における評価の可視化

## —客観的な評価規準作成の試み—

共同研究

代表者：福岡県／大牟田市立明治小学校 校長 馬場 直子

**概要** 小学校外国語活動の評価について、文部科学省は、平成22年5月に「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善などについて」の通知を出している。

明治小学校では、この通知の内容を踏まえながら、外国語活動の客観的な評価の実践研究をめざし、「単元の評価規準の作成」、「毎時間の評価規準と評価方法の設定」、「評価補助簿の作成」および「個人カルテの作成」を図ってきた。

まず、外国語活動の評価の考え方・評価の仕方などについて全職員で検討し、すべての単元の評価規準を、「コミュニケーション」、「慣れ親しみ」、「気付き」の3つの観点で作成した。

次に、毎時間のねらいをもとに3観点から絞って各時間の評価規準を作成し、評価方法を具体化しながら、「評価補助簿」を作成した。毎時間、教師はこの「評価補助簿」を活用し、子どもは「振り返りカード」で自己評価を行い、それぞれの累積を図るようにしている。

さらに実証授業を続ける中で、外国語活動における子どもの状況を話し合い、評価の数値化を試みたり評価規準をより細分化したりする中で、「個人カルテ」の作成に至った。この「個人カルテ」は、評価の観点をカテゴリーに細分化した要素に沿いながら、到達段階を5段階に分けて、子ども一人一人の学習状況を可視化したことに価値があると考える。

これら一連の方途により教師の主観的・恣意的判断を避け、客観的な評価規準を作成することができた。また、評価の可視化が図られ、そのシステムが構築できた。それによって、子どもの状況を多面的、

多角的に把握し、個々に応じた手立てを講じることができるようになってきた。まさに、指導と評価の一体化が図られたものと考える。

### 1 はじめに

福岡県最南に位置する大牟田市は、平成9年の炭坑閉山まで石炭関連産業地域として日本のエネルギー産業を支えてきた街である。近年は、新しい街づくりに向け、市をあげてさまざまな取組がなされている。

教育についても、市の特色の1つとして平成12年度から市内の全小学校で英語活動を取り組み始めた。教育特区ではなく、通常の公立小学校での英語活動である。これまで市教育委員会は多様な研修や具体的な支援を学校に行ってきており、各学校では授業を中心とした校内研修を通じ、子どもの実態に応じて工夫した実践を重ねてきた。

本校は、平成18年度に市教育委員会から「英語活動」の研究指定を受けた。また平成19年度から文部科学省の「小学校における外国語活動等国際理解活動推進事業」の拠点校、平成21年度は「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業」の研究校、さらに、国立教育政策研究所の「小学校における英語教育の在り方にに関する調査研究」の協力校として、外国語活動（英語活動）の研究を行ってきた。平成22年度からは、福岡県教育委員会から3か年の重点課題指定を受け、「コミュニケーション能力の素地をはぐくむ外国語活動の創造」を主題に、これまでの学級担任を

中心とした実践の基盤の上に全学年で研究に取り組んでいる。

このような経過から、本校では、毎年のように研究会を市内外に公開し、また多くの研修視察を受け入れている。それらの研究会や視察で受ける質問は、かつては、「なぜ英語なのか」、「具体的な指導法は…」などであったが、平成23年度からの新小学校学習指導要領完全実施に向け、移行措置期間に全国ほぼすべての小学校で外国語活動が行われるようになった頃から、質問の傾向は変わってきた。小中連携、教科等との関連とともに「評価」について多く聞かれるようになってきた。指導（目標）に対して記録（評価）をするのは当然として、評価の仕方について、その観点や趣旨、方法などを明らかにしていく必要性が高まってきた。

## 2 評価に関する基本的な考え方

### 2.1 国の動向

それでは、適切な評価を行うためには、どのような点に留意すればよいのか。過去の文部科学省の通知などを振り返ってみたい。

まず、「英語ノート」を活用した小学校外国語活動の評価については、「英語ノート」教師用指導資料（平成21年3月）において、目標に基づく3つの観点からの評価規準例が掲載されている（表1）。

■表1：英語ノート1の評価規準例（抜粋）

- ① 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
    - ・ 外国のマナーを理解する。（Lesson 1：行動観察）
    - ・ 様々な考え方のジェスチャーがあることを知る。（Lesson 3：行動観察）
  - ② 外国語を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
    - ・ 自分の様子をジェスチャーを付けて相手に伝えようとする。（Lesson 2：行動観察）
    - ・ 自分の好きなものを含めて自己紹介をしようとする。（Lesson 4：行動観察）
  - ③ 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。
    - ・ 外来語のもとである英語を実際に発話している。（Lesson 4：行動観察）
    - ・ 自分の欲しい食べ物をメニューから選んで答えている。（Lesson 6：発表観察）
- 等

次に、移行期において既に外国語活動を実施している都道府県の参考に資するため、文部科学省は、「小学校学習指導要領等に関する移行期間中における小学校児童指導要録等の取扱いについて（通知）平成20年12月」（文部科学省初等中等教育局）という文書を出している。ここでは、「評価に当たっては、外国語活動で行った学習活動及び当該活動に関して指導の目標や内容に基づいて定めた評価の観点を記載した上で、それらの観点に照らし、児童の学習状況における顕著な事項などを記入するなど、児童にどのような態度が身についたか、どのような理解が深まったかなどを文章で記述すること。その際の評価の観点については、文部科学省発行『英語ノート指導資料第5学年』『英語ノート指導資料第6学年』に示した『評価規準例』を参考とすることが考えられること」という内容になっている。

さらに、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）平成22年3月」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）には、「小学校外国語活動については、平成20年1月の中央教育審議会答申において、数値による評価はなじまないとされていること等を踏まえ、現在、総合的な学習の時間に行われているような、評価の観点を設定し、それに即して、文章の記述による評価を行うことが適当である」と示されている。

本校のように、研究特区や研究開発校でない通常の小学校においては、外国語活動の評価は、これらに則って、適切に行う必要がある。

その後も、文部科学省において評価の観点およびその趣旨について検討がなされ、「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善などについて（通知）平成22年5月」（文部科学省初等中等教育局）に至っている（表2）。

■表2：学習評価および指導要録の改善

- きめ細やかな指導の充実や児童生徒一人一人の学習の確実な定着を図るために、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を評価する、目標に準拠した評価を引き続き着実に実施すること。
- 新しい学習指導要領の趣旨や改善事項を学習評価において適切に反映すること。
- 学校や設置者の創意工夫を一層生かすこと。

この通知の中で、外国語活動における評価の3つ

の観点および趣旨が以下のように示されている（表3）。

■表3：学習指導要録＜小学校外国語活動の記録＞

観点①：コミュニケーションへの関心・意欲・態度
趣旨①：コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。
観点②：外国語への慣れ親しみ
趣旨②：活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。
観点③：言語や文化に関する気付き
趣旨③：外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。

指導要録は、都道府県や地域ごとに学校の設置者が定めるものであるが、一定の統一性が保たれるように、通知などに則って定められることになる。外国語活動の記録では、3つの観点に照らして、子どもの学習状況の特徴やどのような力が身についたかを文章で記述する必要がある。

## 2.2 明治小学校における評価規準作成の歩み

明治小学校では、「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善などについて（通知）平成22年5月」（文部科学省初等中等教育局）の内容を踏まえながら、全教職員で校内研修を行った。特に、学習評価

の改善に関する基本的な考え方や外国語活動の評価の考え方・評価の仕方などについて確認をした。そして、本校なりに評価規準作成について検討することにした。

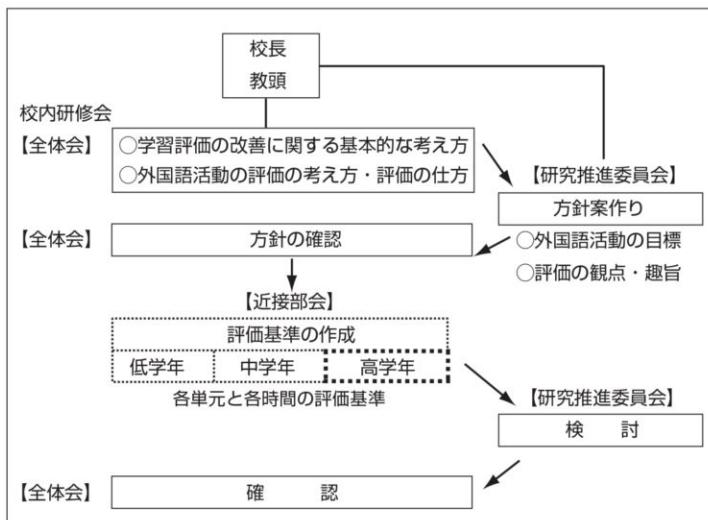
具体的には、次のような手順で行っていた。

まず、研究推進委員会で、評価について、①学習指導要領に示す外国語活動の目標、②文部科学省の通知に示された評価の観点およびその趣旨をもとに、本校の方針案を作り、全体で確認した。

次に、外国語活動の目標と通知に示された評価の観点から、本校では、「観点①：コミュニケーションへの関心・意欲・態度（以下、コミュニケーション）」、「観点②：外国語への慣れ親しみ（以下、慣れ親しみ）」、「観点③：言語や文化に関する気付き（以下、気付き）」の3観点とすることにした。ちなみに、通知では、文部科学省が示した3観点以外にも観点を決めることができるとあるが、本校では、前述の3観点とすることを話し合った。

ところで、本校は、平成19年度から文部科学省の「小学校における英語活動等国際理解教育活動推進事業」の拠点校であったので、他校より早く「英語ノート」（試作版）が配布され、1年間をかけて全单元を実践していた。このときも、5・6年生の該当学年だけでなく、全職員で協働的に指導案作成や評価についても検討を重ねていた。当然、評価については、評価規準を作成して、授業をもとに評価の在り方について話し合っていた。

そこでは、評価の観点については、外国語活動の目標・内容に照らして、「言語や文化、コミュニケ



▶図1：校内体制

ション、音声や表現」の3つとしていた。そして、この3観点は、前述の通知で示された3観点とほぼ同じであることを確認したところである。

つまり、本校でのこれまでの3観点の「言語や文化」は、「観点③：気付き」に、「コミュニケーション」は、「観点①：コミュニケーション」に、「音声や表現」は、「観点②：慣れ親しみ」となる。

このように本校のこれまでの3観点の考え方は、今回の通知で示された観点と同じであったので、通知の観点で整理することにした（表4）。

■ 表4：本校の評価の観点

- ① コミュニケーションへの関心・意欲・態度  
積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けているかどうかを評価するものであり、子どもが実際にコミュニケーションを行おうとしている状況を観察するなどして評価する必要がある。
- ② 外国語への慣れ親しみ  
さまざまな活動を通して、外国語の音声やリズムなどに慣れ親しみ、設定された表現などを使用して、自分の思いを相手に伝えたり、相手の思いを理解したりしているかどうかを評価するものである。子どもの行動や発言の観察、また、活動の中で子どもが作成したものや、子どもが記したワークシートなどからも評価することになる。
- ③ 言語や文化に関する気付き  
外国語活動では、多様な文化の存在を知り、我が国の文化と異文化を比較することで、さまざまな見方や考え方があることに気付かせることが大切である。そのため、ここでは、文構造や文法事項、扱う言語の背景にある文化に対する理解ではなく、幅広い言語に関する能力を指し、言葉の表し方の違いや言語の多様性、言葉の面白さや豊かさなどへの気付きを子どもの行動観察や自己評価などから評価するものである。

このような確認の下、高学年の近接学年部では、「英語ノート1・2」の各単元のねらいをもとに、単元ごとに3観点別の評価規準を作成した。また、低学年と中学年の近接部会でも、本校は、年間15時間の英語活動を行っているので、外国語活動の目標や評価に準じながら、同様に3観点別の評価規準を作成した。

次に、単元ごとの評価規準をもとに、各時間の評価規準を検討した。しかし、毎時間の授業で3つの観点の評価規準を作成して、観点ごとにすべての子どもを評価していくことは難しいことなので、その時間で

重点的に評価を行う観点を1つに絞ることにした。

さらに、各時間の学習では、その評価規準をもとに本時のどの活動を中心に評価していくかも検討した。そこでも、すべての子どもを一度に見て評価することはできないので、①行動観察、②発表観察、③英語ノートの点検、④自己評価、⑤相互評価などから選択した評価方法で、子どものよさを評価補助簿に記録していくことにした。

### 「ランチ・メニューを作ろう」 (英語ノート1 Lesson 9) を例とした 3 評価の手順

このように明治小学校では、客観的な評価規準を作成し、毎時間、具体的な評価の手順を整えた。学級担任は「評価補助簿」を活用し、子どもは「振り返りカード」で自己評価を行い、それぞれの累積を図るようにしている。そして、子どもたちの学習状況を的確にとらえるとともに、その内容を次の活動へと生かし、支援を工夫していくようにしている。

その概要を、5年生の英語ノート1 Lesson 9「ランチ・メニューを作ろう」を例に説明する。

#### 3.1 評価規準の作成

まず最初に、その単元の評価規準を小学校外国語活動の「コミュニケーション能力の素地を養う」という目標から、3観点で作成した。「ランチ・メニューを作ろう」では、次のようにになる（表5）。

■ 表5：単元の評価規準

- 観点①：欲しい食べ物を友達に尋ねたり答えたり、ランチ・メニュー作りをしたりして、友達と積極的にコミュニケーションを図っている。
- 観点②：オリジナル・ランチ・メニュー作りのときに、丁寧な表現 What would you like? – I'd like ~. で欲しい食べ物を尋ねたり答えたりしている。
- 観点③：世界の料理に興味を持ち、日本と外国の料理の違いに気付いている。

#### 3.2 每時間の評価規準と評価方法の設定

「ランチ・メニューを作ろう」は、4時間の単元である。毎時間、この3つの観点からすべての子どもを評価することは難しいので、それぞれの時間に観点を絞って評価規準を設定した。

1時間目は主に「言語や文化への気付き」について、2時間目は「外国語への慣れ親しみ」について、そして、3・4時間目は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」について評価していくことにした。そして、評価方法についても検討した。評価方法については、①行動観察、②発表観察、③英語ノートの点検、④自己評価、⑤相互評価などが挙げられるが、それぞれの時間の活動にふさわしい方

■表6：各時間の評価規準と評価方法

1 時 間 目	観点③：気付き ○世界の料理（外国の朝食）について進んで調べたり日本の朝食と比べたりしている。	①行動観察 ②発表観察
2 時 間 目	観点②：慣れ親しみ ○丁寧な表現で欲しい食べ物を尋ねたり答えたりしている。	①行動観察 ②発表観察
3 時 間 目	観点①：コミュニケーション ○スペシャル・ランチ作りをしながら友達と積極的に交流を楽しんでいる。	①行動観察 ②発表観察 ③英語ノートの点検 ④自己評価
4 時 間 目	観点①：コミュニケーション ○オリジナル・ランチ作りをしながら友達と積極的に交流を楽しんでいる。	①行動観察 ③英語ノートの点検 ④自己評価 ⑤相互評価

法を選択するようにした（表6）。

### 3.3 評価補助簿の作成

単元の目標をもとに作成した評価規準、毎時間のねらいをもとに3つの観点から絞って作成した各時間の評価規準、そして、選択した評価方法を1枚にまとめて、「評価補助簿」を作成した（図2）。

学級の子どもたちの名前を縦軸に（ここでは、A～Lとなっている）、授業の1時間目から4時間目までを横軸に配置し、授業における評価、具体的な子どもの姿、評価方法を書き込むようにした（図3）。

評価については、規準に照らしてより意欲的に活動している子を「○」、頑張っている子を「◎」で記入し、マイナス評価をしないようにした。そして、「はっきりとした声で発話している」、「笑顔で答えている」など、具体的な姿を簡単に記入するようにした。最後に評価方法として、①行動観察、②発表観察、③英語ノートの点検、④自己評価、⑤相互評価と、見取った方法を数字で書き込むようにした。③英語ノートの点検、④自己評価、⑤相互評価については、授業時間でなくても、授業後に回収した英語ノートや「振り返りカード」をチェックすることで、評価が可能である。単元を通して見落としていた子どもがいないように、授業後のチェックも欠かさないようにした。

このような仕組みを整えることで、その時間、その時間の子どもたちの学習状況を的確にとらえると

外国語活動実力評価補助簿【英語ノート(1)】LESSON<9>「ランチ・メニューを作ろう」				
*評価規準		コミュニケーション 欲しい食べ物を友達に尋ねたり答えたり、ランチ・メニュー作りをしたりして、友達と積極的にコミュニケーションを図っている。 慣れ親しみ オリジナル・ランチ・メニュー作りのときに、丁寧な表現“What would you like?” “I'd like ~.”で欲しい食べ物を尋ねたり答えたりしている。 気付き 世界の料理に興味をもち、日本と外国の料理の違いに気付いている。		
【評価方法】 ①行動観察：行 ②発表観察：発 ③英語ノート：英 ④自己評価：自 ⑤相互評価：相 *可能なら特徴的なことを簡単に記入する。				
時間	1時間目【主に：言語や文化】	2時間目【主に：音声や表現】	3時間目【主に：コミュニケーション】	4時間目【主に：コミュニケーション】
評価規準	世界の料理（外国の朝食）について進んで調べたり日本の朝食と比べたりしている。	丁寧な表現で欲しい食べ物を尋ねたり答えたりしている。	スペシャル・ランチ作りをしながら友達と積極的に交流を楽しんでいる。	オリジナル・ランチ作りをしながら友達と積極的に交流を楽しんでいる。
NO	名前	評価方法<①行, ②発>	評価方法<①行, ②発>	評価<①行, ②発, ③英(p59), ④自> 譲歩<①行, ③英(p60), ④自, ⑤相>
1	A			
2	B			
3	C			
4	D			
5	E			
6	F			
7	G			
8	H			
9	I			
10	J			
11	K			
12	L			

▶図2：評価補助簿の構成

時 間		1時間目【主に：言語や文化】	2時間目【主に：音声や表現】	3時間目【主に：コミュニケーション】	4時間目【主に：コミュニケーション】
評価規準		世界の料理（外国の朝食）について進んで調べたり日本の朝食と比べたりしている。	丁寧な表現でほしい食べ物を尋ねたり答えたりしている。	スペシャル・ランチ作りをしながら友達と積極的に交流を楽しんでいる。	オリジナル・ランチ作りをしながら友達と積極的に交流を楽しんでいる。
NO	名 前	評価方法<①行、②発>	評価方法<①行、②発>	評価<①行、②発、③英(p59)④自>	評価<①行、③英(p60)④自、⑤相>
1	A	◎いろいろな食べ物 ②	○	○	◎友だちと会話 ○
2	B	○ペアで会話 ○	○	○	○
3	C	○	○	○	○
4	D	◎大きな声 ○	○	○	○
5	E	○	○	○	○
6	F	○	○	○	○
7	G	○	○	○	○
8	H	○	○	○	○
9	I	◎外国の朝食 ②	○笑顔、進んで ○	○積極的、ランチ作り ○	○
10	J	○	○	○	○
11	K	○	○	○	○
12	L	○	○	○	○

▶ 図3：評価補助簿の記入（記入例）

もに、その内容を次の活動へと生かし、支援を工夫していくようにする。また、通知表や指導要録を作成する際の大切な累積資料としている。

### 3.4 子どもたちの自己評価・相互評価

明治小学校での外国語活動の進め方（1時間の流れ）は、全単元共通して、Warming Up（①あいさつ→②ウォームアップ）、Main Activities（③学習のめあて→④自然に単語や会話を使うメイン・アクティビティ）、Looking Back（⑤学習のまとめ→⑥本時の内容に関連する歌→⑦あいさつ）としている。

子どもたちは、授業の終わりの「⑤学習のまとめ」の中で、自己評価や相互評価をしている。「振り返りカード」を書いたり感想を発表したりしながら、友達同士で活動のよさをほめ合うようにさせている。

以下が、「ランチ・メニューを作ろう」4時間目の「振り返りカード」である（図4）。

『外国語活動』ふりかえりカード 5年1組 名前	
2月26日 今日の活動内容 [オリジナル・ランチ作り]	
よくできた でききた できなかた ①笑顔で、楽しく活動しましたか。 ②音楽に合わせて大きな声で歌ったりチャンツをしたりましたか。 ③相手の目を見て話をしっかり聞きましたか。 ④進んではじめのをたずねたり答えたりしましたか。	
*今日の活動の感想（会話の楽しさや友達のいいところなど）を書きましょう。 私は日本とがん国の朝ごはんを比べてみて、がん国の朝ごはんには、日本の朝ごはんになりような物もあって、いろんな食べ物が食べられていると思いました。 オリジナルランチを作る時、自分がほしい物が伝わったし、前よりもうよく会話をできたのでうれしかったです。それに、みんなと一緒に活動できたのがよかったです。	

▶ 図4：「振り返りカード」の記入（記入例）

簡単に書くことができるよう、①「笑顔で乐しく」、②「大きな声で」、③「相手の目を見て」、④「進んで話す」など、学習内容に基づいた項目に丸をつけるようにした。項目の①～③は単元を通して同じ項目だが、④は学習内容に応じて内容を変更して、自己評価をするようにした。ここでは1時間目は「今朝食べたものをたずねましたか」、2時間目は「自分がほしいものを伝えましたか」、3時間目は「ほしいものをたずねたり答えたりしましたか」としている。そして、記述の部分では、会話の楽しさなどの自己評価の他、お互いのよいところを素直に認め合いながら、相互評価していくようにしている。

### 4 「友達の誕生日を知ろう」 (英語ノート2 Lesson 3)における評価の数値化の試み

#### 4.1 指導と評価の構想

第6学年1組の子どもたちは、これまでの学習で、相手を見てはっきりとした声で話すようになってきている。アンケート調査の結果では、95%の子どもが「外国語をもっと使いたい」と思っている。しかし、「伝わるまで何とかして外国語で話し続けている」という子どもは45%、「多くの人前で発表したい」は50%であった。また「外国語で自己紹介する」という課題で行った事前調査では、「名前と好きなことなどを1文」で答えた子どもが59%、「ジェスチャーを使って何とか伝える」が2%であり、クラスの半数以上の子どもが人前でのスピーチに関心が低かったり、何とかして伝えようとする態度に課題があることがわかった。

本単元では、月ごとの学校の行事や季節の特徴などをスピーチしたり、ALTの国や他の国の行事について聞いたりする活動を通して、コミュニケーションへの積極性を高めたいと考えた。

そこで、授業では、誕生日の行事などの内容を考えるときに、難しい表現があった場合は知っている外国語表現や外来語に言い換えさせたりジェスチャーで表現させたりして、相手に何とかして伝えようとする態度を身に付けさせるようにした。また、表現が思い浮かばないときはペアや近くのグループ、みんなで考えさせてることで、友達と協力し

■表7：各時間の学習のめあてと評価規準（方法）

	めあて	評価規準（方法）
1時間目	自分の生まれた月を英語で言い、伝えたい内容を決めよう。	観点②：慣れ親しみ ○大きな声で月を言ったり、When is your birthday? を聞いて答えたりしている。 (自己評価、行動観察)
2時間目	自分の生まれた月の行事や季節の特徴がわかるようなスピーチにしよう。	観点①：コミュニケーション ○自分の誕生日の行事などについて伝えたい内容を2個以上考えて表現方法を決めてスピーチしている。 (英語ノートの点検、行動観察)
3時間目	試しのスピーチをして自分の思いが伝わるのかグループで確かめ合おう。	観点①：コミュニケーション ○相手の方を見て、相手に聞こえる声で、ゆっくり、繰り返して、ジェスチャーを付けてスピーチをしている。 (行動観察、自己評価、相互評価)
4時間目	ALTの先生に自分の生まれた月の行事や季節の特徴を伝えよう。	観点①：コミュニケーション ○相手の方を見て、相手に聞こえる声、ゆっくり、繰り返すなどに気を付けてスピーチをしている。 (行動観察、自己評価)

ながら活動させるようにした。また、評価に関しては、表7のような計画を立てた。

「観点③：気付き」については、1時間目と4時間目の自己評価をもとに授業後に評価するようにした。

## 4.2 授業の実際

学級担任の支援としては、まずスピーチをするときに気を付ける観点として、相手の方を見て、相手に聞こえる声、ゆっくり繰り返し言ふことを確認した。

次に、ALTや友達に「イメージシート」(図5)をもとにスピーチをして自分の思いを伝えさせた。その際、自分のパートナーがスピーチをするときは、そばについてサポートするように指示した。

このような支援から、子どもたちは、ALTや友達に自分の生まれた月の行事や季節の特徴を知っている外国語や外来語で、聞き手の反応を確かめながら、相手に聞こえる声でゆっくり繰り返し言ふたり、ジェスチャーを付けたりしながら、より多くの内容が伝わるようにスピーチをしていった。

最後に、スピーチの後には、スピーチでの達成感を持たせるために、ALTからスピーチの内容について文化などの差異性や共通性からコメントをもらつた。

評価に関しては、前述の評価の手順を踏まえるとともに、「観点①：コミュニケーション」と「観点②：慣れ親しみ」に関しては、「○=活動をよく頑張っている子」、「○=頑張っている子」ではなく、発展的にそれぞれの段階の到達部分を明確な数値などに示すよう試み、「A」規準、「B」規準、「C」規準、の3段階で記入するようにした(表8)。

A 誕生日の行事や季節の特徴の名称	B 行事等で自分で知っている事実や考え方		
① プール開き	② 6月16日	③ 3年生と6年生とプールに入った	④ 1年生と一緒に遊んだ
C ○ 知っている言葉に言いかえよう ○ ジェスチャーを考えてみよう		アーストックス スイミン	アーストックザ スイミングプール
D ○ ほめる(相互評価)から ○ スピーチで気を付けること	○ ジェスチャーや話す言葉の評価が良かったです。 ○ 相手の反応をみながら、ゆっくりとなるべく分かりやすい単語を使う。		

▶図5：「イメージシート」の記入(記入例)

■表8：3段階に分けた評価規準

	A	B	C
観点①	聞き手の <u>反応</u> を <u>確かめながら</u> 、外國語や外來語に <u>ジェスチャー</u> や <u>表情</u> を加えて表現している。	聞き手の方を見て、 <u>はつきり届く大きさの声</u> で話している。	聞き手の方を見ずに、 <u>一方的に話</u> している。
観点②	聞き手の反応を確かめながら、言い換えたり繰り返したりした関連する内容を <u>3文以上</u> 付け加えて話している。	関連する内容を <u>2文</u> 付け加えて話している。	関連する内容を <u>1文</u> 付け加えて話している。

### 4.3 指導と評価の考察

「観点①：コミュニケーション」については、外國語や外來語にジェスチャーを加えて発表した子ども（「B」規準以上と考えられる）が15名であった。これは、「イメージシート」にスピーチする内容とジェスチャーの仕方を記入してスピーチをしたことでの、ジェスチャーをすることに自信を持つことができ、定着したからだと考える。その理由として、15名のうち、13名が外國語や外來語とジェスチャーを3個以上考えていたことや12名が「振り返りカード」に、ペアの子どもからアドバイスやよさをコメントしてもらってうれしかったなどの感想を書いていたからである。

しかし、ジェスチャーはしているが、相手の反応を確かめながら繰り返しをしている子ども（「A」規準）は、8名しかいなかった。これは、自分のスピーチをすることだけに集中していたからであると考える。また、聞き手側もただ聞くだけでなく、伝わったかどうか反応することで、スピーチをする人も相手の反応を見ながらスピーチをすることができると考える。

「観点②：慣れ親しみ」については、27名が2文以上で自己紹介することができるようになった（「B」規準）。これは、「イメージシート」を活用したことでの、伝えたい内容を増やす手順を把握できたことやペアで内容を増やしてスピーチをする経験をしてきたからであると考える。

しかし、まだ7名の子どもが1文でしか発表できていない（「C」規準）。そのうち4名の子どもは「イメージシート」への記入が難しいとしていた。これ

は、伝えたいことがあっても言い換えた言葉が思い浮かばないことや事実などの内容、言い換えた言葉を詳しく書きすぎてしまい、どのように表現してよいかわからなかったからだと考える。そこで、「イメージシート」の構造を改善し、記入の仕方を簡素化させる必要がある。

## 5 「行ってみたい国を紹介しよう」 (英語ノート2 Lesson 6)における 個人カルテ作成の試み

### 5.1 指導と評価の構想

本单元では、ALTや友達に自分が行ってみたい国とその理由（魅力：見たい所、食べたい物、やってみたいことなど）をスピーチさせる。見たい所や食べたい物などの外國語が多くあるという特徴から、ペアやグループで聞き取ったことを出し合せたり、ALTとのやり取り（スピーチ）を通したりする

■表9：各時間の学習のめあてと評価規準（方法）

	めあて	評価規準（方法）
1時間目	行ってみたい国を英語で言い、ALTに伝えたい内容を決めよう。	観点②：慣れ親しみ ○ Where do you want to go? と聞いて I want to go to ~. と大きな声で答えている。 (自己評価、行動観察)
2時間目	自分が行ってみたい国とその理由がわかるスピーチにしよう。	観点①：コミュニケーション ○自分が行ってみたい国とその理由について、伝えたい内容を2文以上考えて、その表現方法を決めてスピーチをしている。 (英語ノートの点検、行動観察)
3時間目	試しのスピーチをして自分の思いが伝わるのかペアで確かめ合う。	観点①：コミュニケーション ○知っている外國語や外來語で、相手の反応を確かめながら、場に応じた声の大きさ、ジェスチャーなどを使って、ペアで試しのスピーチをしている。 (行動観察、自己評価、相互評価)
4時間目	ALTの先生に自分が行ってみたい国とその魅力を伝えるスピーチをしよう。	観点①：コミュニケーション ○知っている外國語や外來語を用い、相手の方を見て確かめながら、ジェスチャーや表情を付けて、伝わるまで繰り返している。 (行動観察、自己評価)

ことで、英語と日本語の発音の強勢の違いに気付かせることができる。また、英語ノートに載っている国以外の外国を取り上げる子どもにとっては、説明するために言い換えたりジェスチャーを考えさせたりする活動ができる。

そこで、本单元の指導にあたっては、話題に応じた自分の知っている事実や考えといった表現内容と、どうやって伝えるかといった表現方法を「イメージシート」を使って考え、実際にALTや友達にスピーチをして伝える活動を行わせた（表9）。

## 5.2 授業の実際

単元を通して、子どもたちは、ALTや友達に自分が行ってみたい国とその理由を、外国語や外来語で、聞き手の反応を確かめながら、相手に聞こえる声、ゆっくり、繰り返す、ジェスチャーをしながら、より多くの内容が伝わるようにスピーチをしていった（図6）。その際、自分のパートナーがスピーチするときには、そばについてサポートするようにさせた。

評価規準をもとにこのスピーチ場面を評価したところ、「観点①：コミュニケーション」については31名が「A」規準で、「観点②：慣れ親しみ」については28名が「A」規準であった。これは、ペアでどう言ったらわかりやすいか内容を考えたり試しのスピーチをしたりしたことにより、聞き手の反応を確かめながら言葉やジェスチャーを付加してスピーチをすることに慣れたためであると考える。

以上の行動観察や自己評価、相互評価から、「イメージシート」を活用したスピーチ活動は、自分の



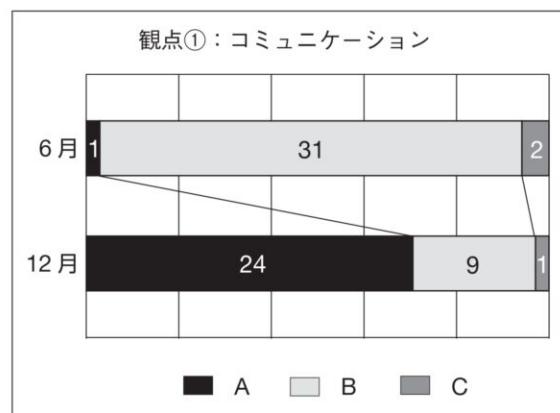
▶ 図6：子どものスピーチ（例：A児）

思いをわかりやすく伝える手立てとして有効であったと考える。

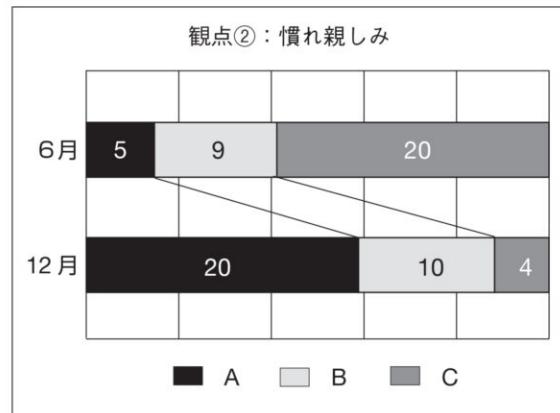
## 5.3 指導と評価の考察

「コミュニケーション能力の素地を養う」という観点から、「友達の誕生日を知ろう」（Lesson 3）実践前と「行ってみたい国を紹介しよう」（Lesson 6）実践後の子どもの変容を調査した（図7、図8）。

これは、学級担任が「評価補助簿」を活用し、また、子どもは「振り返りカード」で自己評価を行い、それぞれの累積を図ったものである。さらに、実践前と実践後には、自己紹介することを課題とし、ALTと1対1で会話や自己紹介をする様子をビデオ撮影し、前述の評価規準をもとに、評価したものである。



▶ 図7：観点①から見た子どもの変容



▶ 図8：観点②から見た子どもの変容

「観点①：コミュニケーション」（図7）については、「A」規準の子どもが1名から24名に増えた。これは、「イメージシート」にスピーチする内容とジェスチャーの仕方を記入してスピーチをしたことや試しのスピーチで相手を変えて3回相互評価をしたこ

とで、よさを認めてもらい、外国語や外来語で表現しながらジェスチャーをすることに自信を持ち、ジェスチャーをすることが定着したからだと考える。

「観点②：慣れ親しみ」(図8)については、30名の子どもが2文以上で自己紹介することができるようになった(「A」規準、「B」規準)。これは、イメージシートを活用したことで、伝えたい内容をより多くの言葉でわかりやすく表現する手順を把握できることやペアで内容を付加したりアドバイスし合ったりしてスピーチをする経験をしたからであると考える。また、「A」規準の子どもが5名から20名に増えた。これは試しのスピーチで聞き手の反応を見て言葉を付加する経験をしているので、伝わっていないようであれば言葉を付加しようとする態度が身に付いたからであると考える。しかし、4名の子どもが1文でしか発表できていない(「C」規準)。言いたいことを1つ考えることはできるが、他の内容やわかりやすく伝えるために付加する言葉を1人では考えることが難しいと感じているようであった。ペア活動に頼りすぎてしまい、1人で会話する機会が持てなかつたようである。

#### 5.4 個人カルテの作成

以上のように、学習時間の子どもたちの学習状況を的確にとらえることができるようになったものの、あらためて撮影したビデオを振り返ると、「A」～「C」規準の枠ではあいまいな部分もあることがわかった。例えば、「観点①：コミュニケーション」では、外国語や外来語にジェスチャーを加えて発表してはいるが、相手の反応を確かめていなかったり、表情が硬かったりしている子ども(「A」規準と「B」規準の中間と考えられる)が多数いたことである。そこで、3段階に分けた評価規準をさらに見直し、5つの段階に細分化(表10)し、個人カルテを作成することにした。

紹介した3単元の実践の他、すべての実践から外国語活動における子どもの状況を話し合い、評価すべき観点をカテゴリーに分類した。具体的には、3観点をそれぞれ2分割することで、そのカテゴリー化を図った。また、「スマイル、ジェスチャー、アイコンタクト」についても段階化を図った(表11)。

■表10：「観点①」の細分化(例)

A	B	C
聞き手の反応を確かめながら、外国語や外来語にジェスチャーや表情を加えて表現している。	聞き手の方を見て、はっきり届く大きさの声で話している。	聞き手の方を見ずに、一方的に話している。
5	4	3
観点①(話す) 聞き手の反応を確かめながら、外国語や外来語にジェスチャーや表情を加えて表現している。	聞き手の方を見て、外国語や外来語にジェスチャーや表情を加えて表現している。	聞き手の方を見て、はっきり届く大きさの声で話している。
2	1	

■表11：3観点のカテゴリー化

## 「観点①：コミュニケーション」のカテゴリー化

- 相手意識・目的意識を持って聞く。
- 相手意識・目的意識を持って話す。

- ・ 豊かな表情でコミュニケーションを図る。  
(スマイル)
- ・ ジェスチャーを交えてコミュニケーションを図る。  
(ジェスチャー)
- ・ 相手の目を見てコミュニケーションを図る。  
(アイコンタクト)

## 「観点②：慣れ親しみ」のカテゴリー化

- チャンツやALTなどの発話を聞く。
- チャンツやALTなどへの発話・表現をする。

## 「観点③：気付き」のカテゴリー化

- 言葉の面白さ・豊かさに気付く。
- 多様なものの見方・考え方を深める。

## 6 個人カルテ作成を通した評価の可視化

### 6.1 個人カルテの構成

「観点①：コミュニケーション」を細分化(表10)したように、他のカテゴリー(表11)においても、観察可能な要素に沿って1～5段階を作り、それぞれの到達部分を明らかにした上で、子ども一人一人のカルテを作成した(カテゴリーと段階表は、資料

参照)。

2分割した3つの観点を、6頂点のチャートとして表し、継続評価していくことで、最終的に、どのカテゴリーに課題があるか明白にしていくようにした。また、それを補足する項目として、段階化した「スマイル、ジェスチャー、アイコンタクト」の到達部分にチェックを入れていくようにした。また、「特記事項」として、学習状況にかかる自由記述の欄も設けた。

## 6.2 個人カルテの活用例

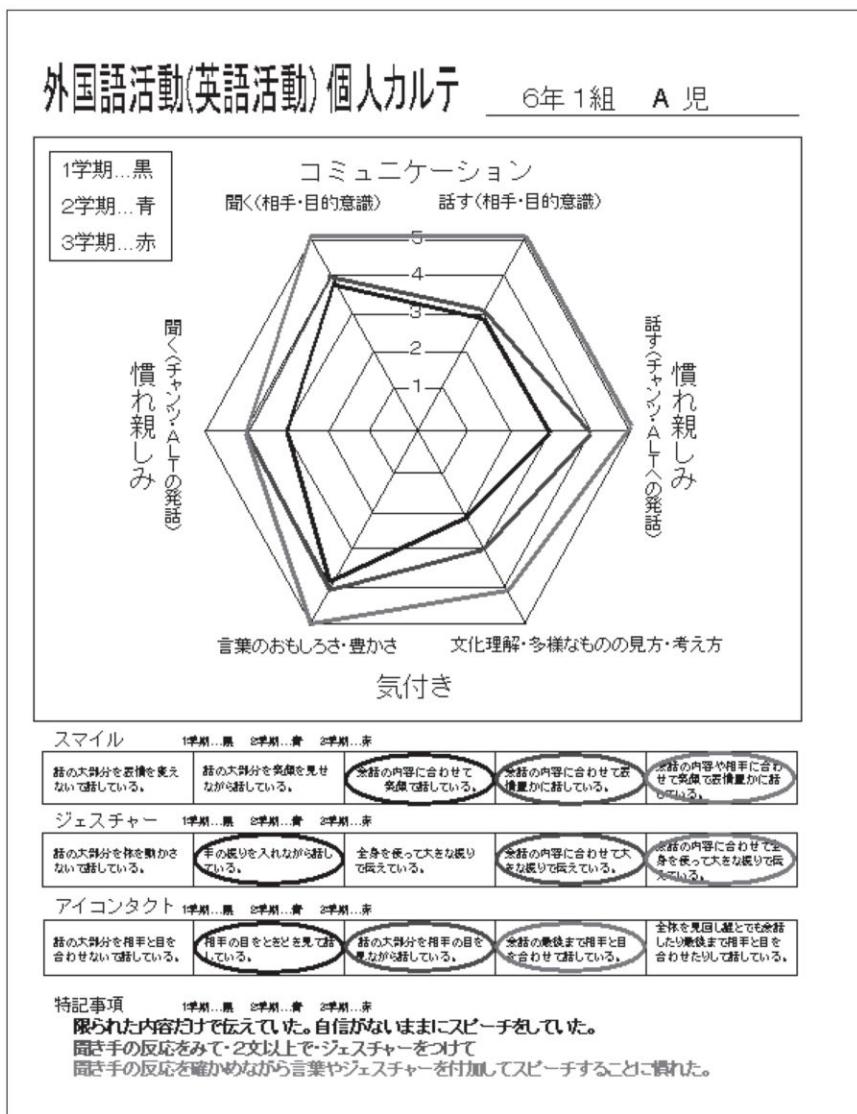
図9は、実証授業などを通して作成したA児の「個人カルテ」である。

A児は実証授業の中で、試しのスピーチで聞き手

の反応を見て言葉を増やす経験をしてきた。その中で、伝わっていないようであれば言葉を付加しようとする態度が身に付いてきた。また、担任やALT、友達によさを認めてもらったことで、自信がつき、ジェスチャーが定着した。その様子が個人カルテの中では、「コミュニケーション(話す)」の項目や「慣れ親しみ(話す)」の項目のポイントの上昇、また特記事項での記述として現れている。

このように「個人カルテ」は、3つの観点を観察可能な要素に細分化し、細分化した要素に沿って「1」～「5」段階に分けて、子ども一人一人の学習状況を可視化したことには価値があると考える。

さらに、担任は他の単元でも、「個人カルテ」のポイントの低い項目を見取っては、授業時間ごとに



▶ 図9：A児の個人カルテ（記入例）

それらの評価の観点を重点化しながら、指導と評価の一体化を心がけてきた。

## 7

## まとめと今後の課題

今回、外国語活動の客観的な評価の実践研究をめざし、「単元の評価規準の作成」、「毎時間の評価規準と評価方法の設定」、「評価補助簿の作成」および「個人カルテの作成」を図ってきた。これら一連の方途により教師の主觀的・恣意的判断を退け、客観的な評価規準の作成が図られたと考える。また、評価の可視化が図られ、そのシステムが構築されたとも考える。

しかし、検証の部分においては、まだ課題が残る。カテゴリー分けが妥当であるかどうか、段階分けの

評価規準が適切であるかどうかなどは、今後、子どものデータを見直し、その妥当性を確認する必要がある。

### 謝 辞

本研究の機会を与えてくださいました（財）日本英語検定協会の関係者の皆様、選考委員の先生方に心より感謝申し上げます。この研究を機に、本校職員一同、さらに実践を積み上げて参りたいと存じます。

また、この研究を進めるにあたり、あらゆる段階で貴重なご指導・ご助言を賜りました和田稔先生に厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。今後ともご指導のほど、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

### 参考文献 (\*は引用文献)

- 影浦攻.(2010).「小学校英語プレビュー 完全実施で 知っておきたい指導法＆実践案」.東京：明治図書.
- 菅正隆・明治小学校.(2009).「学級担任のための『英語ノート』指導案集70」.東京：明治図書.
- 菅正隆・明治小学校.(2010).「外国語活動評価づくり 完全ガイドブック」.東京：明治図書.
- \*文部科学省.(2008).「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」.

\*文部科学省.(2008).「英語ノート1 指導資料」「英語ノート2 指導資料」「小学校外国語活動研修ガイドブック」.

大城賢・直山木綿子.(2008).「小学校学習指導要領の解説と展開 外国語活動編」.東京：教育出版.

和田稔.(2000).「小学校英語教育 A to Z vol. 1～4」.東京：開隆堂.

資料：評価のカテゴリーと段階

観点	段階	1	2	3	4	5
① コミュニケーション	聞く (相手・目的意識)	話し手の方を見て聞いている。	相手の言うことを聞き、わかったときにうなずいている。	相手の言うことをうなずきや首をかしげるなどの反応をして聞き取っている。	聞いてわかったことを言葉で反応して返している。	聞いてわかったことを言葉で反応したり、聞き返したりしている。
	話す (相手・目的意識)	話の大部分を聞き手の方を見ないで、一方的に話している。	話の大部分を聞き手の方を見て、話している。	聞き手の方を見て、はっきり届く大きさの声で話している。	聞き手の方を見て、外国語や外来語にジェスチャーや表情を加えて表現している。	聞き手の反応を確かめながら外国語や外来語にジェスチャーや表情を加えて表現している。
	表情 (スマイル)	話の大部分を表情を変えないで話している。	話の大部分を笑顔を見せながら話している。	会話の内容に合わせて笑顔で話している。	会話の内容に合わせて表情豊かに話している。	会話の内容や相手に合わせて笑顔で表情豊かに話している。
	身振り (ジェスチャー)	話の大部分を体を動かさないで話している。	手の振りを入れながら話している。	全身を使って大きな振りで伝えている。	会話の内容に合わせて大きな振りで伝えている。	会話の内容に合わせて全身を使って大きな振りで伝えている。
	目線 (アイコンタクト)	話の大部分を相手と目を合わせないで話している。	相手の目を時々見て話している。	話の大部分を相手の目を見ながら話している。	会話の最後まで相手と目を合わせて話している。	全体を見回し誰とでも会話したり、最後まで相手と目を合わせたりして話している。
② 慣れ親しみ	聞く (チャンツ・ALTの発話)	英語を楽しみながら聞いている。	英語の発音の特徴に気をつけて聞いている。	英語を聞いて、その英語をまねながら言っている。	強勢・リズムのある英語を口ずさみながら言っている。	強勢・リズムのある英語を口ずさみながら聞いて、体全体で反応している。
	話す (チャンツ・ALTへの発話)	伝えたいことに関連する内容を1文付け加えて話している。	伝えたいことに関連する内容を2文付け加えて話している。	伝えたいことを言い換えたり繰り返したりして、2文付け加えて話している。	伝えたいことを言い換えたり繰り返したりして、3文以上で話している。	聞き手の反応を確かめながら、言い換えたり繰り返したりして、3文以上で話している。
③ 気付き	言葉の面白さ・豊かさ	繰り返し歌ったり、発話したりして英語のリズムに気付いている。	繰り返し歌ったり、発話したりして発音やリズムの違いに気付いている	発音・リズム・音節の差異性に気付いている	発音・強勢・リズム・音節の差異性に気付き、使おうとしている。	発音・強勢・リズム・音節の差異性や共通性に気付き、使ってている。
	文化理解多様なものの見方・考え方	外国の歌を繰り返し歌ったり、ゲームを楽しんだりしている。	外国の遊びや行事について差異性に気付いている。	文化や習慣の差異性や共通性に気付いている。	異なる文化や習慣に対して興味・関心を持ち、差異性や共通性を伝えようとしている。	異なる文化や習慣に対して興味・関心を持ち、寛容な態度を示している。